IV. 動 物

哺乳動物（ほにゅう）

生坂村の哺乳動物としてのまとまった記録はありませんが、郡市誌によると東筑摩郡・松本市・塩尻市には7目15科34種の哺乳類が生息しています。

日本全体では、110種を数えますが、このうち本州には57種、長野県には49種とされています。

これらの哺乳動物の多くは夜行性であるか、または夜明けや夕方の薄暗い時間に行動するもので、人間の活動時間とはずれがあり人の目につくことが少ないのです。従って分布や生活については、狩猟関係者や、哺乳類研究者以外にはあまり知られていません。生坂産の種類数については、村内の方々の協力を得ての調査確認の必要があります。右の表の備考には生坂に生息すると思われるものを載せてあります。

本州・長野県・松塩筑の哺乳類の種数の比較

目	科	本州	長野県	松塩筑	備　考
食虫目	トガリネズミ	6	4	3	カワネズミなど
	モグラ	5	5	2	アズマモグラなど
翼手目	キクガシラコウモリ	2	2	1	キクガシラコウモリ
	ヒナコウモリ	17	12	4	ウサギコウモリ、アブラコウモリなど
霊長目	オナガザル	1	1	1	ニホンザル
兎　目	ウサギ	1	1	1	ノウサギ
齧歯目	リ　ス	3	3	3	リス、ムササビ、モモンガ
	ヤマネ	1	1	1	ヤマネ
	ネズミ	10	10	8	ハタネズミ、クマネズミ、ドブネズミなど
食肉目	ク　マ	1	1	1	ツキノワグマ
	イ　ヌ	2	2	2	キツネ、タヌキ
	イタチ	5	4	4	イタチ、テン、アナグマ
偶蹄目	イノシシ	1	1	1	イノシシ
	シカ	1	1	1	ホンシュウジカ
	ウ　シ	1	1	1	ニホンカモシカ
合　計	15	57	49	34	

イノシシ　本州・四国・九州に分布し、長野県北部の多雪地帯には分布していません。生坂では、大城などの山地に土を掘り起こして水田の馬耕をしたような跡が所々にあります。また、体外の寄生虫駆除や体温を冷やすため泥土をこねた「ヌタ場」も見られます。木や草の根や茎（くき）を常食にしているからです。以前はトウモロコシなどの農作物を荒らして大きな害を与えたこともあります。

アナグマ　別名「むじな」とか「まみ」と呼んでいますが、全般的には「ささぐま」といっています。生坂には多く生息するのか、国道などで事故死しているのを見かけます。食物は極めて雑食で、サワガニ・ヘビ・昆虫・穀類・魚と何でも食べます。タヌキ（イヌ科）と混同されやすいですが、全く生物学上は別種で、外見は毛の長さが短く、先は細く尖（とが）っています。尾の長い方がタヌキで区別がつきにくいものです。穴掘りの名人で穴居生活が主です。生坂には、タヌキも多くいます。

ノウサギ　草食性の哺乳動物で、山林原野の周辺部、山ろく地帯から亜高山帯にかけて広い生息場所を持っています。中型の哺乳動物としては最も多く生息し、

生坂山地にいるイノシシ

生坂に多いノウサギ

穴掘りの名人アナグマ

「わな」、猟銃などで捕獲される数も多いです。キツネ・テン・イタチ・タカ・フクロウなどの天敵も多いですが、天性のすばらしい足を持ち、またピンと立った長い耳で危険を察知する能力にも優れ、自分を守っています。植林した幼木や畑の野菜まで食べ荒らすという害を及ぼすため、人から嫌われています。このノウサギには遺伝的なものか、２つの型があります。夏は褐色で、冬には毛が白くなるものと、一年中茶褐色で冬も夏も変化しないものがあります。前者は、新潟県から北安地方に広く分布し、生坂では北部に多く見られるものです。一般には、後者の一年中体毛の変化しないものが多くいます。また、生活は夜行性で、単独で行動します。

キツネ　小型の日本犬よりやや大きい位でイヌに似ていますが、尾が長く太い房状になっています。生坂にいるものは、本州・四国・九州にいるアカギツネの仲間で、北海道にはキタキツネが住んでいます。ときには、ニワトリや飼いウサギを襲うこともありますが、一方ではネズミ・ノウサギの退治用のために歓迎され放獣されることもあります。繁殖以外は全く穴に入らず、南向きの林の斜面などに寝ぐらを持って生活します。雪の上では必ず爪を引いた足跡を残し、犬に比べるとまっすぐであり、左右の足幅が狭くなっているという特徴があります。また、キツネ火などの伝説にもよくでてきます。

テン　ネコ位の大きさで、四肢は短く、体は細長く、歯は鋭く肉を切り裂くのに適しています。ノネズミ・ノウサギ・ヤマドリなど、何でも食い殺して骨ごとたいらげる“山の殺し屋”とも呼ばれています。金色のふさふさした毛皮は最高級で高価です。毛の色は夏毛は褐色を帯びていますが、冬になると全身黄色になるものと、褐色のままでいるものがあります。前者をキテン、後者をススステンといい、県下では、北方と高い所にはキテン、南方や低い所にはススステンがいるといわれています。

ツキノワグマ　イノシシと並んで最も大型の哺乳動物です。本州では中部以北に多く、四国にも少数います。生坂で捕えられたこともあり、現在も山中には生息しているということです。県下に生息するものは、のどもとに月の輪のような白い毛の部分があるのでツキノワグマと呼ばれ、北海道にいるヒグマより一回り小さく凶暴性も下です。ふだんは人の顔を見ると逃げますが、冬眠前のエサ探し時期や、子ども連れの時は人間にも挑みます。どんな皮でも破る鋭い爪と強い力を持ち、今でも毎年何人かの人がクマに襲われています。「クマのい」は胆のうを日陰で乾燥したもので、昔から腹痛の特効薬とされ貴重品です。毛皮も尊ばれていますが、厚い真皮の下には白い脂肪層があり、冬にはより厚くなり「クマのあぶら」として猟師は大切にして、厳寒の時手足にできるひびやあかぎれにつけたものです。

伝説の多いキツネ

よい毛皮のとれるテン

生坂にもいるツキノワグマ

犀川の魚

犀川は、日本海に流れ込む川で、ここに住む魚類としてはサケ・マス・ヤマメ・スナヤツメなどがあり、太平洋に注ぐ川に住む魚類とは、分布上から南北の特徴がはっきり区別されます。

昔、この犀川でサケ・マスの類が採れたことを知る人も数少なくなりました。発電用ダムの建設により、海からさかのぼる魚が途絶えてしまい、さらに各種の汚濁と乱獲により魚の数も減少し、また土木工事、砂利採集などから魚の住む環境が悪くなったため、清流性の魚の数が減り、汚水に強いものが目立っています。

また、最近アユ・コイ・フナ・ニジマス・ヤマメなどが移殖放流され、以前から住んでいた魚と入り混じって魚の分布の特徴的なものが失われつつあります。

梓川・犀川水系の魚類として、ダム調の魚も含めて12科27種が記録されていますが、そのうち以前から住んでいたものは18種といわれています。

生坂に多い魚　ウグイはアカウオともいわれ、下流から上流のイワナのいる所まで広く分布しています。4～7月ごろ産卵し、この時には婚姻色といって朱赤色の帯状が鮮やかに現れます。唐揚げ・塩焼き・甘露煮にして食べます。

コイ・フナ類は、生坂・平ダムで釣人を楽しませています。オイカワは南方系の魚で、県下の中・下流域に多くいます。昭和の初めごろから見られ、背部は青みを帯びた淡褐色で、体側と腹部は銀白色。口ひげがなく、雄の尻びれが大きいのが特徴です。ジンケンともいわれます。

あまり見られない魚　スナヤツメは昔はいました。目の後方に左右7対のえら穴があり、一見8個の目に見えるためヤツメウナギともいわれます。アカザも少なくなりました。体は暗橙色で、手でつかみ捕ろうとするとひれのとげに刺され激痛を感じるので、サソリと呼ばれています。カジカも今は少なくなってしまった清流性の魚でまれにいます。

昭和電工広津発電所の放水口付近は、青木湖の水温の低い水（夏季17℃前後）が流入しているため、イワナ・ヤマメなどが住んでおり、水温の高い犀川としては特質すべきことです。

犀川に多いウグイとオイカワ

犀川にもいるイワナ（体長44cm）

姿を見ないアカザ▼　▲少なくなったカジカ

イワナがいる昭和電工広津発電所付近

ウグイを食べるイワナ

鳥

生坂ダムは、水鳥たちの楽園です。それは、この一帯が狩猟禁止地区として保護されていることと、ダムの周囲が山で湖面のふちがヨシや樹木で覆われているなど、水鳥にとっては危険から身を守ることのできる格好の生活場所となっているからです。寒さの厳しい冬になると、数千羽の水鳥の姿を見ることができます。それはここの水の流れが緩やかで、また水面が凍ることがないからです。

生坂ダムに集まってくる水鳥の多くはカモの仲間です。これらのカモは、どこからやって来るのでしょうか。

カモの仲間は、遠いシベリアの湿原や日本の山中の湖で子育てをします。そこが冬になると雪や氷で覆われてしまうので、安心して生活できる南の国の日本や、生坂ダムのような里の湖に移ってくるのです。

生坂ダムで冬を過ごしたカモの仲間は、春の訪れとともにシベリアの湿原や日本の山の湖に帰っていきますが、カルガモ・マガモ・オシドリなどの一部はここにとどまって子育てをします。6月から8月にかけては、湖面をかわいいひなを連れて泳ぐ親鳥の姿を見ることができます。

	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月
1 カルガモ	1.938	2.108	1.263	524	126	54	369	163	276	988	1.692	2.062
2 マガモ	2.850	2.730	2.708	1.057	146	14	13	31	19	178	1.855	3.074
3 オナガガモ	26	20	43							62	190	120
4 コガモ	926	920	366	230	8	5			4		895	907
5 トモエガモ	38	38	40									
6 ヨシガモ	16	16									6	2
7 ヒドリガモ	456	432	255	238						88	348	174
8 オシドリ	8	10	8	8	2		1	2		4		2
9 アメリカヒドリガモ	1	2										
10 アメリカコガモ	1	1										
11 ホシハジロ		26										
12 キンクロハジロ										3		
13 オカヨシガモ	36	12										
合　計	6.296	6.315	4.683	2.057	282	73	323	196	299	1.323	4.386	6.341

生坂ダムのカモの数（1986.10〜1987.9）

マガモ

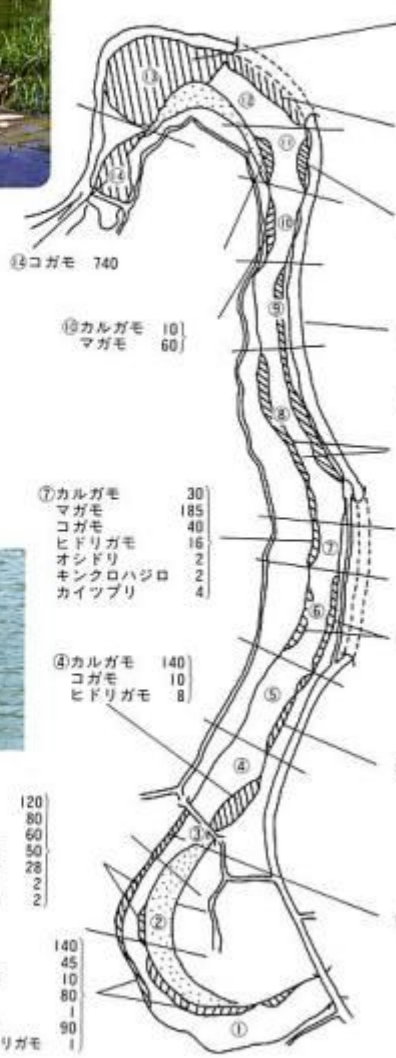
カルガモ

オシドリ

コガモ

オナガガモ

ヒドリガモ



生坂ダムの水鳥
1986.2.11の調査

サンコウチョウ

ツキヒホシホイホイホイ（月日星ホイホイホイ）と鳴くことから名付けられたこの鳥の声を、池沢の谷のスギ林で聞くことができます。30cmもの長い尾羽を蝶のようにヒラヒラさせて飛ぶ姿は大変美しく、夢の世界に引き込まれる思いがします。ウメノキゴケをクモの糸ではり合わせた美しい巣を作ります。全国的にも少ない数ですので、「毎年来て子育てをしてくれたら」と願っています。

イカル

キーコーキー、またはオキクニジューシー（お菊二十四）と澄んだ高い美しい声で鳴くので、目につきやすい鳥です。日置神社の境内や万平（まんだいら）などでその姿を見かけます。種実・穀類・豆などを好み、回しながら食べるところからマメマワシと呼ぶ所もあります。

カワセミ

ゴイサギ

サンコウチョウ

イカル

カワセミ

「動くヒスイ」と、宝石のように呼ばれているこの鳥の姿を一度見れば、その美しさのとりこになってしまうことでしょう。平地の水辺を生息場所にしているので、犀川沿いではよく見かけますが、数は多くはありません。水面上の樹上から水中に飛び込んで魚を捕らえるすばやい動作も見ごたえがあります。見かけたらしんぼう強く観察してみましょう。

ゴイサギ

名前の由来が醍醐（だいご）天皇から五位の位を授かったことにあるといわれているゴイサギは、姿は大変美しいのですが、「グゥー」と鳴く声は自分の品位を傷つけているように思えてなりません。群を作って生活し、夜行性であるため、日中は樹木の枝に静かに体を休めています。生坂ダムの池沢口では、冬季になると20羽ほどの群を観察できます。

蝶（ちょう）

雑木林で昆虫採集をする子ども

1．民家の周辺のチョウ

チョウはわたしたちにいちばん身近ということになるので、知っている種類がいくつかいると思います。幼虫の時カタバミの葉を食べて育つヤマトシジミがその代表です。また、アゲハ・キアゲハ・クロアゲハなど、大型のアゲハチョウの仲間もよく見られます。その他では、幼虫がエノキの葉を食べるテングチョウ、エノキやヤナギの葉を食べるヒオドシチョウ、コデマリやユキヤナギの葉を食べるホシミスジなどがいます。また、花の蜜を吸いに来るモンシロチョウ・モンキチョウ・ベニシジミ・アカタテハ・キタテハ・ウラギンヒョウモン・コミスジ・イチモンジセセリなども見られます。

マツバギクの花で蜜を吸うヤマトシジミ

子どものころは、多くの人が近くのクヌギやコナラなどの雑木林へ行って、チョウを観察したり昆虫採集をしたものです。昆虫の中でも、チョウがいちばん翅の色が美しく、昆虫の女王といえるでしょう。

生坂村には合計90数種類のチョウが見られます。どんなチョウがいるかを、生息環境別に紹介します。

コスモスの花で蜜を吸うキアゲハ

ヒャクニチソウの花で蜜を吸うウラギンヒョウモン

花で蜜を吸うテングチョウ

マリーゴールドの花で蜜を吸うキタテハ

2．田や畑とその周辺のチョウ

田や畑には、幼虫の時に農作物の葉を食べてそだつチョウがいます。田の稲にはイチモンジセセリの幼虫（イネツトムシと呼ばれる）がよくつき、葉を丸めて巣を作り、中に入っていて葉を食べる時だけ出てきます。成虫は秋になると数が急に多くなり、秋に咲く花に群がって蜜を吸います。また、ヒメジャノメの幼虫も稲の葉を食べることがあるため、水田の周辺で成虫を見ることがよくあります。

畑では、キャベツやダイコンなどのアブラナ科の野菜の葉を食べるチョウの幼虫がよく見られます。この幼虫は、体が緑色をしているため一般に“青虫”と呼ばれていますが、これはモンシロチョウやスジグロシロチョウの幼虫です。また、幼虫がニンジンやパセリの葉を食べるキアゲハや、マメ類の畑には暖地性のチョウで長野県では寒すぎて冬越しできないウラナミシジミが見られることがあります。梅の木の周辺では幼虫が梅の葉を食べるオオミスジがよく見られます。

以上のような田や畑で見られるチョウの幼虫は、農家の人にとっては害虫であるため、農薬散布によって駆除されています。

(上)キャベツの葉の裏で休むモンシロチョウの幼虫
(下)羽化したばかりの成虫

花で蜜を吸うイチモンジセセリ

セリ科植物の葉を食べる
キアゲハの幼虫

朝露のある葉で休む
ヒメジャノメ

アメリカセンダングサの花で蜜を吸うウラナミシジミ

翅を開いて葉に止まるオオミスジ

3．草原や林縁のチョウ

明るい草原で育ったり、そこに咲いている花で吸蜜するチョウには、ベニシジミ・ヒメシロチョウ・アカタテハ・クジャクチョウ・ウラギンスジヒョウモン・メスグロヒョウモン・ジャノメチョウ・オオチャバネセセリなどが見られます。ベニシジミは紅色をした美しくかわいいチョウで、幼虫の時スイバやギシギシの葉を食べて育ち、春から秋までほぼ連続して見られます。また、年によっては暖地性のチャバネセセリが見られることがあり、花でよく蜜を吸っています。

林縁では、スジグロシロチョウ・キチョウ・ルリタテハ・イチモンジチョウ・コミスジ・フタスジチョウ・ミドリヒョウモン・コツバメ・トラフシジミや、その他にも多くの種類が見られます。

チョウは種類によって冬越しする状態が違います。キチョウやルリタテハなどは成虫のままで冬越しをしますが、卵や幼虫、蛹で冬越しをするチョウもいます。また、ヒオドシチョウやヒョウモンチョウ類の一部は、夏眠といって盛夏の暑い中では体温調節ができずに活動を停止するものもいます。

花で蜜を吸うベニシジミ

アカツメクサの花で蜜を吸うチャバネセセリ

翅を開いて花に止まるメスグロヒョウモン

羽化したばかりのフタスジチョウ

▲アメリカセンダングサの花で蜜を吸うキチョウ

オカトラノオの花で蜜を吸うミドリヒョウモン▶

4．雑木林や山林のチョウ

雑木林では多くのチョウが見られます。雑木林を構成している各種の樹木の葉を食べて育つものと、雑木林の樹液に集まるものとに大きく分けられます。中には、その両方のものもいます。

幼虫が樹木の葉を食べて育つチョウには、スミナガシ・ミズイロオナガシジミ・ウラミスジシジミ・ハヤシミドリシジミ・ウラジロミドリシジミ・メスアカミドリシジミ・キバネセセリなどのほか、多くの種類が見られます。生坂村での特徴は、幼虫がカシワの葉を食べて育つハヤシミドリシジミとウラジロミドリシジミが分布していることです。

樹液に集まるチョウには、ゴマダラチョウ・コムラサキ・オオムラサキ・ヒメジャノメ・サトキマダラヒカゲ・オオヒカゲなどが見られます。樹液の出る樹木はブナ科のクヌギやコナラ・ミズナラなどで、樹液にはチョウだけでなくクワガタ類・カミキリ類・コガネ虫類・アリ類・ハチ類・ガ類など多くの昆虫類が集まり、樹液を吸ってエネルギー源にしています。ですから、ブナ科植物の雑木林をいつまでも絶やさないようにして、昆虫たちの大切な餌場を確保していきたいものです。

樹液で吸汁するスミナガシ

羽化したばかりのウラジロミドリシジミ

葉で休むウラミスジシジミ

オオムラサキの幼虫

蛹

羽化後の成虫

クヌギの樹液で吸汁するサトキマダラヒカゲ

樹液で吸汁する成虫